

建 録

古代象形絵文字作家
竹本大亀氏による「建築」揮毫

第4回 京都建築賞 結果発表

■主催 (一社)京都府建築士会

■後援 京都市・宇治市

■趣旨目的

京都府建築士会創立60周年を記念して本賞を創設。本会会員による、京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とする。また今回は、新たな部門として藤井厚二賞を創設しており、この藤井厚二賞については次号で紹介。

■審査委員会

委員長 岸 和郎(京都大学教授)

委員 米田 明(京都工芸繊維大学教授)

平田晃久(京都大学准教授)

■受賞一覧

最優秀賞／サントリーワールドリサーチセンター

設計者：小幡剛也・大平卓磨・佐藤達保

優秀賞／中村藤吉本店 表屋復元改修工事

設計者：中村則正

優秀賞／龍谷大学 和顔館

設計者：飯田善彦

奨励賞／北白川の角家

設計者：梅原 悟

入選／右京の家

設計者：波多野崇、村田昌司

入選／New Kyoto Town House 2

設計者：竹口健太郎

2016年 京都建築賞 審査総評

審査委員長 岸 和郎

京都府建築士会によって創設された賞である京都建築賞の本年度は4年目になります。その審査の経過についてご報告いたします。

本年度から審査委員が変更となり、私は委員長として留任、新しく審査委員として、京都工芸繊維大学大学院教授の米田明氏、京都大学大学院准教授の平田晃久氏のお二人を迎えて、新しい審査委員会のメンバー構成となりました。

資料の提出期限である2月29日時点で応募作品数は14点であり、昨年度の13作品と同程度ということになりました。建築士会による様々な事前確認のプロセスを経た後、4月11日に一次審査委員会が開催されました。ここでは書類審査により現地審査作品を選ぶことが目的であり、様々な議論の結果、「北白川の角家」、「右京の家」、「New Kyoto Town House 2」、「サントリーワールドリサーチセンター」、「中村藤吉本店 表屋復元改修工事」、「龍谷大学 和顔館」の6作品を現地審査作品として決定しました。

引き続き5月19日には、上記6作品の現地審査を行い、それぞれのクライアント、そして設計者のご協力により無事に審査を終了することができました。

現地審査終了後、ただちに最終審査委員会を開催し、上記6作品について以下の結論を得ました。まず、現地審査を行った作品6点とも、十分に評価すべき水準にあることを審査員全員で確認し、6作品を少なくとも京都建築賞入選とすることとし、引き続き賞の議論に入りました。

その結果、「サントリーワールドリサーチセンター」を最優秀賞、「龍谷大学 和顔館」、「中村藤吉本店 表屋復元改修工事」の2作品を優秀賞、「北白川の角家」を奨励賞とすることに決定しました。

本年度の最優秀賞とした「サントリーワールドリサーチセンター」については、京阪奈学研都市の茫漠と捕らえどころなく広がる風景の中、存在感のある形態と素材を採用した外観と、それとは対照的に、そこで働く人間にとって快適なインテリア・ランドスケープを実現している点は郊外のオフィス空間の新しい提案として顕彰し、最優秀賞に値する作品である、と審査委員全員の一致した結論を得ました。

優秀賞の「龍谷大学 和顔館」については、個別の建築作品というよりも、既存のキャンパスに新しく挿入された新しいキャンパス・インフラストラクチャーとして、これから変化する大学のベンチマークとしての建築提案である点、また「中村藤吉本店 表屋復元改修工事」については長い歴史を持ち変化を続けてきた建築群の復元修復であり、戻るべき過去の姿を最も古い創建当時の姿ではなく大正時代と定めたことで、その建築が持っていた最も特徴的な形態を再現できたことは復元修復のプロジェクトとして評価されるべきであろうという点、以上のような点から優秀賞に推挙したいと考えました。

また奨励賞の「北白川の角家」についてはその可能性と謎に満ちた表現を評価し、奨励賞に推挙することとなりました。

以上で京都建築賞の審査過程とその結果の報告といたしますが、次年度以降の応募作品への期待を最後に記して、ひとまず本年度の審査報告としたいと思います。



北面ファサード

【講評】
「サントリーワールドリサーチセンター」は、大企業をクライアントとする大手ゼネコン設計部による大規模建築で、通常なら一定の保守性を帯びることを余儀なくされそうであるが、実際にはそんな後ろ向きの手堅さのようなものを全く感じさせない、爽快な建築だった。

それは単に、L字プランをずらしながら重ねる、形式的解法の明快さだけによるものではない。与件を明快な図式で翻訳するタイプの建築は少なくないが、それらが必ずしも爽快さや希望を感じさせるわけではない。ここで素晴らしいと思えたのは、空間の図式と、場所を活用しようとする人々との対話が、発生していたことだ。あるいはそれを発生させるべく、周到な思考と丁寧な努力が（おそらくは）重ねられていたことだ。実際、中央の立体的なスペースの近辺には様々な人々がごく自然な感じで混ざり合っており時間を過ごしていた。設計の過程の中でもワークシヨップを繰り返して、議論を重ねたそうである。もちろん、ここで重要なのは、ワークシヨップをしたか否かというアリの有無ではなく、空間と人との積極的な対話のサイクルが発生させているか否か、である。確かに、すべての場所がすでに理想的に使われているわけではない。むしろ使われ始めてからもこの建築のよりよい活用の仕方を試行錯誤するために



外装ディテール

度々話し合いの機会が設けられていると聞いた。

これは竣工してからもどう使っていくか考えないといけない、ある意味で未完結な建築である。しかしその大らかな構えはかえって人々との関わりを生み、この建築を生き生きとしたものになっている。同じような積極的な緩さは、L字の形式以外の部分の作り方にも現れている。大枠としてのL字形式は通底させながら、残りはむしろ共通点が無いくらいに個々のデザインが施されている。建築デザインというより、むしろ都市計画に近いほどだ。それらが総体として、明快的な形式のもつ堅苦しさを感じさせない、街のような雰囲気を生んでいる。

だから、この建築はこれまでの価値観に対するある種の謎かけである。固定化された機能的タイポロジーを変えることにどんな意義があるのか。建築というものがどこまで未完結でありえ、人々とのインタラクシヨンを起こすきっかけとして評価できるのか。またそのことが建築というものをどのように、より自由で爽快なものに変えていくのか。そういう問いを発している点において、これは極めて力強い建築の実践であり、京都建築賞の最優秀賞にふさわしいものであると言える。

（平田晃久）

第4回 京都建築賞



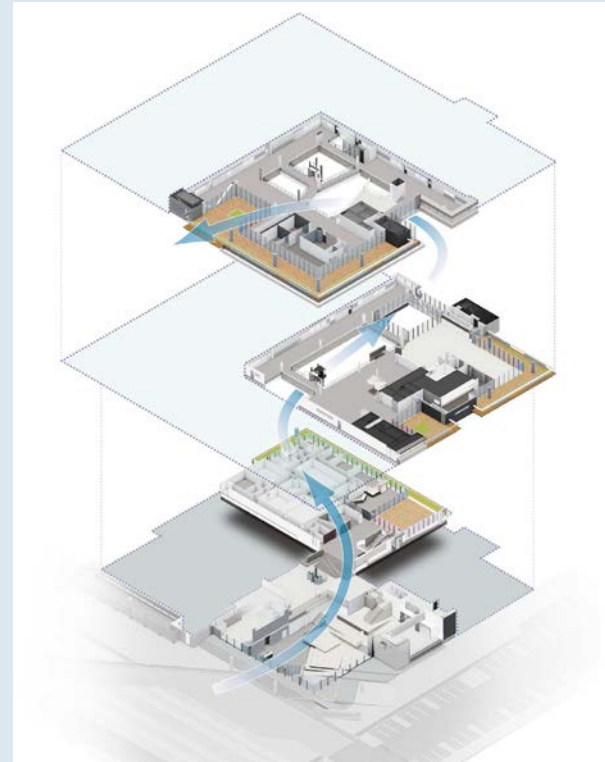
2階コラボエリア



エントランスホールから2階コラボエリアを望む



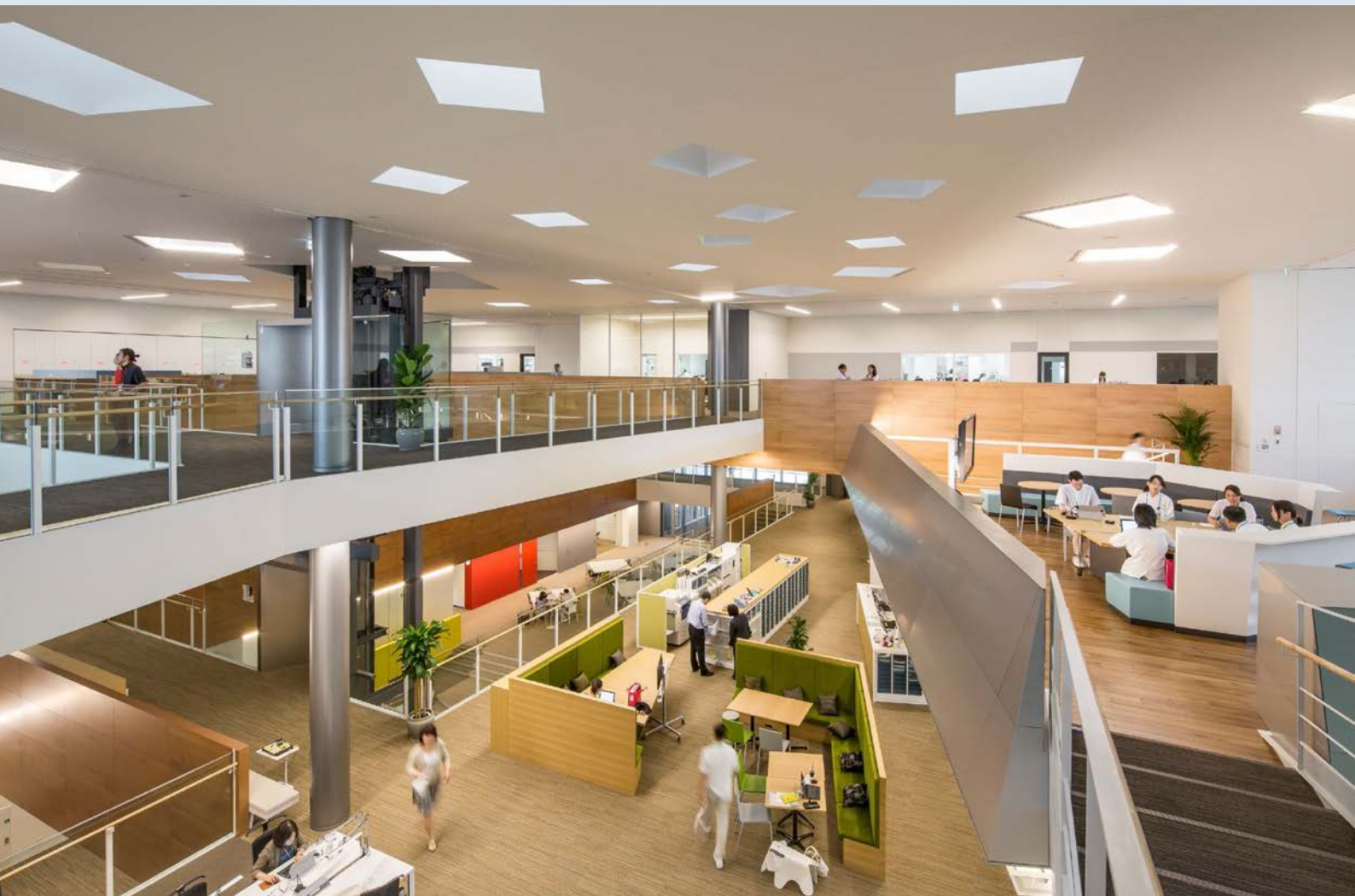
トップライト見上げ



フロアダイヤグラム

所在地／京都府相楽郡精華町
竣工／2015年5月
敷地面積／49,150.58㎡
建築面積／7,905.57㎡
延床面積／23,332.83㎡
構造規模／鉄骨造 地上4階建

内部空間



中村藤吉本店 表屋復元改修工事

優秀賞

設計者：中村則正／NEO建築設計室

所在地／京都府宇治市
竣工／2014年3月



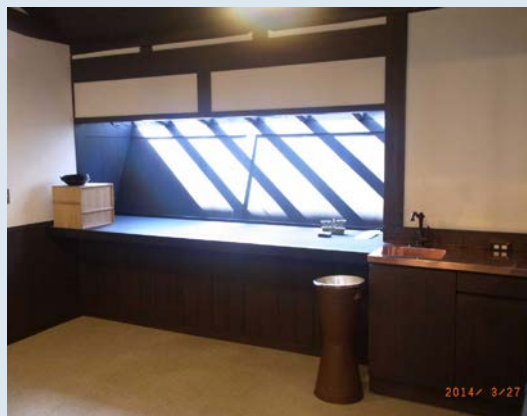
宇治橋通 西より東

【講評】
江戸末期に創業の「宇治茶」を取り扱ってきた老舗が、もともとの生産拠点を宇治市が制定した文化的景観の重要な構成要素として再生し、一般の人々に開放された商業施設として再活用された事例である。敷地約1000坪のなかに工場、倉庫、主屋などが、中庭を介して配置されており、今回はそのうちの表通りに当たる宇治橋通りに面して立

つ、表屋の復元・改修が審査対象である。
表屋はかつての茶葉の焙炉場で、中央の中庭に抜ける玄関通路の土間を挟んで、中央の主屋と連続し、宇治橋通り沿いのフアサードを形成しているが、経年のうちの増改築によって当初の様相は失われていた。そこで大正期の状態に復元するべく、かつて表屋の特徴的な要素であった越屋根と拝見場が、再現され新たに付加されている。
越屋根とは、切妻屋根の棟部分に設けられた換気・採光のための子屋根であり、拝見場はハイスайдライトからの光によって茶葉の品質を鑑定するコーナーである。外観的には、前者は水平性が強調された屋根のスカイラインへのアクセントとなっており、また後者は上方から光を取り入れるために傾けられ、黒く塗られた外壁面が、通り側のフアサードに立体的なユニークな表情をもたらししている。また同時に内部では、前者の高窓からの光によって露わにされた木軸架構が浮かび上がる効果がもたらされており、後者は内側も黒く塗られた斜めの壁が上部からの光が反射して拡散する、ある意味でモダンなしつらえの茶葉の選別体験の場となっている。
このように設計者は、時の流れのうちに幾重にも堆積した、澱のようなものを丁寧に取り払い、隠蔽されてしまった深層の建築の原初状態を発掘し、新たな息吹を与えている。それもまさしくオリジナルな建築的モチーフを用いて、生き生きとした光を当てることによって成し遂げられており、その的を得た考古学的再生の手際の確からしさが評価された。(米田 明)



明治期 宇治橋通からの写真



拝見場



店舗内



玄関通路より座敷



所在地／京都市伏見区
竣工／2015年1月
敷地面積／58,151㎡
建築面積／5,721.66㎡
延床面積／27,612.37㎡
構造規模／S造+RC造
一部SRC造
地下2階地上5階建

【講評】

京都市内の都市型の大学キャンパスに「歴史、環境を継承しながら、新しい教育のあり方を提案する建築」として計画された学校建築である。既存のキャンパスが整備され始めてから既に50年以上経ち、施設群の建設は一巡したため、再度次世代に向けた新たな教育環境の全体像を策定する中、その計画方針に従った最初の建物として建設されている。既存キャンパスは、中央部に中庭を持ち、その周囲をレンガタイル貼りの箱型の教室棟が囲み、ささかタイトに取り囲む、いわば西洋的なブロックの壁面によって内部と外部が画定される構えをもっている。

今回の建築は、最寄り駅からのメインルートとなる東門からのアプローチを受け止める、キャンパスの北東部に位置する。そこで10000人にもぼる学生の流入を妨げることなく、スムーズに中央の中庭方向へ導くように採用された建築のストラテジーは、人の流れを阻害する垂直の壁はできるだけ少なくし、水平のスラブによって構成するというものであった。それらは5階まで多層化され、

大きな縁側空間あるいは軒下空間としてのテラスが幾つかの外部階段によって最上階までつながれている。こうした半外部空間の連続は、地上から垂直方向への人の移動を簡便にし、採光や通風を充足させ、さらにはその開放性によってコミュニケーションの誘発にも寄与している。

そしてスラブ間に設けられた水回りエレベーターの最小限コアの外周壁にのみ、既存教育棟の外壁とよく似たレンガタイルが貼られている。この処理によって、既存コンテクストとの親和性が図られ、透明性による相対的位置関係が明確になって、教育環境と学生の居場所との一体化がもくろまれている。

その一方で比較的壁面の必要な図書館の書庫や大講義室は、地下2層にわたって設置されており、多くの必要床面積を確保して、地上階での開放性・透明性を担保している。一見すると即物的で簡潔な建築の佇まいだが、周到な建築的配慮によって裏づけられているところが、評価された。

(米田 明)

設計者：梅原 悟／UME architects



前面道路より正面ファサード



2階メインフロア のLDK



2階メインフロア のLDK

【講評】

奇妙な建築である。まずは昨今流行っている「薄い外被」の建築ではない。構造体がある場所を基準に考えるなら、その壁面は外側にも内側にも厚くなるように仕上げ面が重ねられている。ところが、とりあえず仕上げ面と今書いたが、正確には仕上げ面をレイヤーする、という風に建築家に意識されている訳でもない。

屋根もそうだ。東と北には公園とキャンパスがあり、その景観は変化しないし、そこには将来何も建たない。その境界条件を受けて屋根形状を決めたという論理的な決定プロセスのすぐ後で、建築家はその屋根面の裏側、すなわち天井の形態を内部空間から主観的に決定したという説明を重ねる。結果として、屋根面も壁と同じように厚いものとなっている。

その「厚さ」とは、何なのか。この建築を見ていて、最初から最後まで気になるのは、その「厚さ」である。それだけならまだ、わかり易い。建築家はその内部に付け加えられた面の要素を場所によってはヴォリュームとして、場所によっては面として表現する。外部も同じだ。その「厚さ」が重量を持つように表現されていたり、違う場所ではその逆だったりする。

この住宅を特徴づけるのは、そうした「謎」だ。

それは全く、現代的な表現、それも現代の日本に主流の軽快な表現の対極にある。審査委員が3人とも気になって仕方がないのが、その「謎」であり、それに自覚的な解答を見つけて欲しいという審査委員の想いの形が、この奨励賞である。

(岸 和郎)

所在地／京都市左京区
竣工／2014年5月
敷地面積／91.62㎡
建築面積／54.93㎡
延床面積／119.80㎡
構造規模／鉄骨造 基礎のみRC造
地下1階地上2階建

古代象形絵文字作家 ^{たけもとだい き} 竹本大亀 氏 プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫（きこう）活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

藤井厚二賞 結果発表

■趣旨目的

藤井厚二賞は、第4回京都建築賞の募集に際して、新たな部門として創設しました。この賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて、卓越した洞察力、探求心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。「木」をテーマとして、木造作品に拘らず、内外装仕上げに利用した計画や流通・再生に関わる提案などを広く募集しました。

■審査委員

河井敏明（一級建築士事務所河井事務所 主宰）
畑 友洋（畑友洋建築設計事務所 主宰）
森田一弥（森田一弥建築設計事務所 主宰）

■受賞一覧

（応募：10作品）

藤井厚二賞／House of Kyoto
設計者：満田衛資
現地審査選出作品／軒下の家
設計者：三宅正浩
現地審査選出作品／house T / salon T
設計者：木村吉成
現地審査選出作品／段床三角ボイドの家
設計者：宮武淳夫
現地審査選出作品／ろんどくれあんと
設計者：安田 溪、安田 滋

※現地審査選出作品は順不同

審査にあたって

審査委員 河井敏明・畑 友洋・森田一弥

今年度（平成28年度）より京都建築賞に新しく藤井厚二賞が設けられることとなり（今年度テーマは「木」、この賞の審査という榮譽ある役目を我々三人がつとめることとなった。我々としては、そもそも新しい賞には未だかたがたない訳で、具体的な審査の前にまずこの賞の骨格すなわち評価基準を議論し定める所から作業を始めることが必要であった。そこで今回は、まず事前に評価基準を議論する為の会合を行い、その後ここで行われた議論に基づき審査に臨むというかたちを取っている。

基準をめぐる議論では、まずこの賞が京都の名を冠した賞であることから、やはり（何をもって京都的とするかには様々な議論があるものの）何らかの「京都的なもの」を価値づけているかどうかを評価の中に取り入れる必要があるという点が共有された。

そして次に、藤井厚二氏が一連の住宅作品を通して、環境問題やサステイナビリティなど、今日我々にとっても喫緊の課題であるテーマに取り組んだこと、そしてそれら的大変に重要だがともすると目立たず見落とされがちなテーマに対して大げさな身振りではなくストレートに取り組んだことの2点に鑑みて、藤井厚二賞では、その建築がそのような志に通じるテーマをもっているか？そしてそこに真摯に取り組んでいるかどうかといったことを、建築の規模や視覚的なインパクトの大小に左右されず評価することとした。

さらに、今年度の藤井厚二賞には「木」というテーマが与えられているため、木の持つ寛容さや中庸性といった質を汲み取って、現代における木の価値を広く捉える形で評価することとした。

審査に際しては、こうした議論を経て導かれた三つの評価軸に対して設計者がどのよう「理解し」「どれだけ」実現しているかという視点から審査委員3名が応募作を評価し議論して最終的に藤井厚二賞受賞作一作を選出した。

内観



設計者：満田衛資



内観



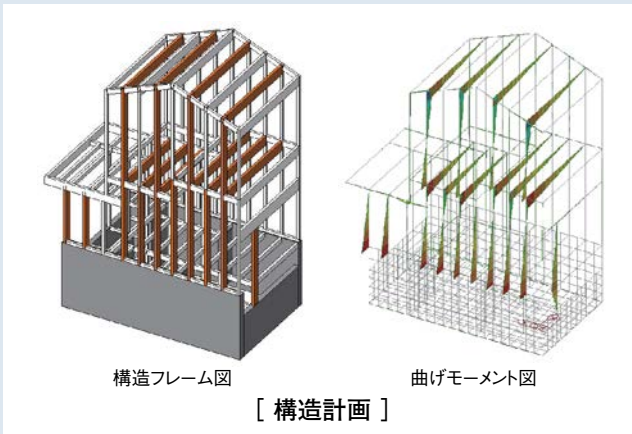
外観



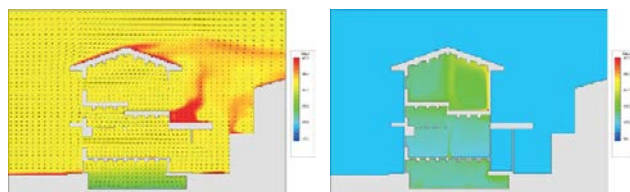
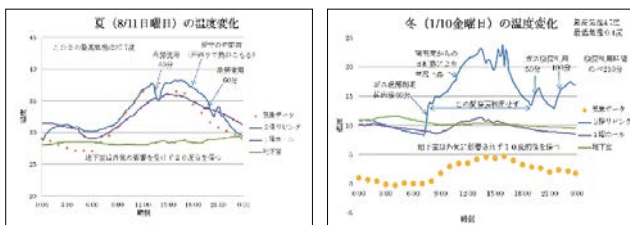
内観

所在地／京都市北区
竣工／2013年3月
敷地面積／56.16㎡
建築面積／31.86㎡

延床面積／79.88㎡
主体構造・構法／
木造(一部壁式鉄筋コンクリート造)・木質ラーメン構法
地上2階地下1階建



【講評】
House Of Kyoto (以下HOK)は「伝統的な京町家の建築としてのつくり方」と「京町家の立地する街区の構成」を現代社会の中で取り戻すこと(=recreate)を一つのテーマとして構想・設計された住宅である。これまでにも町家の再生、再創造を謳った建築は多く存在するが、他の町家再生建築等とHOKを大きく隔てているのはこの後者への着目、更にいえば前者と後者を抜きがたく関連した総体と捉えている点である。現代の町家をつくるために、設計者はまず町家や街区にある論理をまず抽出し、町家の空間構成やディテールといった具体的要素を一旦解体、その後に論理に基づいて要素の再構成を行うというプロセスを踏んでいる。例えば、まず街区の「連担された裏庭」という概念を抽出し、かつての単純につながっていた(文字通り連担されていた)裏庭というトータルな姿は一旦解体して、1階(半地下部分)のある程度プライバシーを保てる裏庭とその上空部分の視覚的には連担している(防犯上はつながっていない)テラスという二つの実現可能な要素に分けて再編成することで「連担された裏庭」を実現するモデルを示している。そこに見られるのはやみくもに過去の形を復元しようとするユートピア的夢想でもなく、社会状況の中での全くの諦念でもない、冷静で粘り強く、洗練された知性である。



〔環境計画〕

勿論HOKは単体の建築としても上記の冷静な戦略に基づき再編成されている。例えば現代京都の狭い敷地に適用する為に、京町家の「折り畳まれたような」空間構成を設計者は垂直方向に再構成している。そしてその上で出てくる構造上の問題や熱的挙動等の問題に丁寧なエンジニアリングで応えているのである。町家の筒状の空間は木質ラーメン構造により実現され、CFD等も活用しながらスキップ状の断面構成を様々な建具で可変的に運用するシステムを構築して熱的挙動の調整を図っている。

最後にHOKが設計者の自邸である事にも触れておくべきであろう。建築家には現実の施主に対して瑕疵の無いものを手渡す責務を負っている一方で、社会に対してより良い未来をつくる為に未だ見ぬ像(「モデル」)を造り出す責務もまた負っているものであり、この二つは時として相反する。これを相克する為に建築家は時として自らが施主となるのである。藤井厚二氏の最も知られ、現代建築に影響を与え続けている作品が自邸である聴竹居であることは故無き事ではないのである。

以上に見る通り、House Of Kyotoの志の高さ、達成度は別格であり、審査委員は全員一致で藤井厚二賞を贈ることを決定した。

houseT/salonT

設計者：木村吉成



外観



内観

【講評】
世のほとんどの建築家が尻込みするようなローコストの条件下で選択された、一階の全ての外部仕上げがアルミサッシという外観は、山間部の気候への対応として熱環境などへの疑問は残るものの、風景が通り抜けるような爽やかな内外空間とともに、京都の周縁部の集落における新しい建築形式の提案として大変新鮮な印象を受けた。また、各部のエレメントやディテールにおいても「誤読」というキーワードで独特の材や意匠が用いられており、慣習化した京都の建築形式や現代の住宅のつくられ方に疑問を投げかける問題作である。この住宅の提示しているテーマや空間がローコストであることを越えてなお普遍的な価値を持つ提案たりえているのか、審査の過程では一致した確信が得られなかったが、それを見届ける意味で今後の住まい手の方にも注目していきたい作品である。

所在地／京都市左京区
竣工／2015年10月
敷地面積／199.74㎡
建築面積／69.56㎡
延床面積／92.74㎡
構造規模／木造軸組
地上2階建

軒下の家

設計者：三宅正浩



北側からの外観



トオリニワから見るダイニング・リビング・玄関

【講評】
山科の住宅地に突如として現れる、軽快な切り妻屋根の連なりからなる開放的な生活空間には好印象をもった。特にあえて南側通路に寄せた住宅の構え方、北側の親世帯住宅との間に設けられた共同の畑など、屋根とその軒下による周囲との関係の作り方は魅力的である。また壁上部に連続してガラスを嵌め、屋根面が浮き上がって見えることにより室内外のつながりが感じられ、住宅内部の心地よい開放感を実現していた。古い集落と新しい住宅地の境目に位置することから、設計者から両者を「調停する」屋根としての説明があったが、「調停」の手法としてなぜこの屋根がふさわしいのか、もう少し説明が欲しいと感じたが、京都の新旧の住宅地境界における新しい屋根形式の提案として興味深い試みである。

所在地／京都市山科区
竣工／2013年11月
敷地面積／203.31㎡
建築面積／84.45㎡
延床面積／119.88㎡
構造規模／木造軸組工法
地上2階建

ろんどくれあんと

設計者：安田 溪、安田 滋



外観



展示室

【講評】
故梅棹忠夫氏の居あるいは書斎であった場を修理、改築し、新たに小さな住まい及びギャラリーとして開かれた場を生み出した建築。周辺は北白川における独特の知的サロンとしての歴史が残る地域であり、そのような地域の魅力の一端を担うにふさわしい、即物的な生き生きとした場の成り立ち、コートを取り巻く巧みな屋根勾配による空間の秘匿性など特筆すべき場がここにはあり、審査日には若い音楽家がコートに美しい音色を響かせていたことも、この建築が開かれた場として生きていることの証であると感じられた。既に幾たびかの修理、改築を重ねた痕跡が見られ応募者個人を評価するというよりは、長い年月をかけ、多くの人々が手をかけ続けた結果として生まれたこの開かれた場、そしてそのような場を受け止める地域性をこそ祝福したい。

所在地／京都市左京区
竣工／2015年8月
敷地面積／197.80㎡
建築面積／95.10㎡
延床面積／140.30㎡
構造規模／木造
2階建

段床三角ボイドの家

設計者：宮武淳夫



南東側からの外観



ダイニング側から北西方向を見る

【講評】
宅地開発の端部に位置する個人住宅。2層分の階高を一方でそのまま2層、一方で3層とし、吹き抜けを挟んで縦につないでいく特異な手法がとられ、結果として所室空間の配列は並列的な連続とは異なり、少しずつ重なり合いながら展開する、限られた気積の中に重層的な空間を折りたたむことに成功していると感じられた。しかし、最大の特徴である螺旋状に展開する所室の配置からは、表裏の区別が感じられ、肯定すべき環境とそうでないものを二元的に取り扱っているように見え、周辺環境への応答としてやや疑問が残ったが、狭小不整形地において居住空間を如何に組み立てうるかという点において正面から取り組んだ意欲作であると感じた。

所在地／長岡京市
竣工／2014年12月
敷地面積／88.33㎡
建築面積／42.87㎡
延床面積／77.47㎡
構造規模／木造
地上2階建